終焉をめぐって

柄谷行人

kōjin karatani

終焉をめぐって

柄谷行人

福武書店

柄谷行人（からたに・こうじん）
一九四一年、尼崎に生まれる。東京大学経済学部卒業、同大学院英文科修士課程修了。法政大学教授。一九六九年、「〈意識〉と〈自然〉――漱石試論」により群像新人賞受賞。一九七八年、「マルクスその可能性の中心」で亀井勝一郎賞受賞。著書に「隠喩としての建築」「畏怖する人間」「意味という病」「日本近代文学の起源」「探究Ⅰ」「探究Ⅱ」などがある。

終焉をめぐって

一九九〇年五月一五日第一刷発行
一九九〇年六月二七日第三刷発行

著　者　柄谷行人
発行者　福武總一郎
発行所　株式会社福武書店
東京都千代田区九段南一―三―二八
〒一〇三　電話（〇三）三二〇―二一一三
振替口座（東京）六―一〇五〇九七

本文印刷　大日本印刷
平版印刷　栗田印刷
製本所　小泉製本

（落・乱丁本はお取替え致します）
（定価はカバーに表示してあります）

©K. Karatani 1990
Printed in Japan

ISBN 4-8288-2335-2 C0095
NDC 914 194 248p

終焉をめぐって　目次

第一部　固有名をめぐって

一九七〇年＝昭和四十五年――近代日本の言説空間　9

大江健三郎のアレゴリー――『万延元年のフットボール』　45

村上春樹の「風景」――『1973年のピンボール』　75

第二部　終焉をめぐって

同一性の円環――大江健三郎と三島由紀夫　117

歴史の終焉について　136

死語をめぐって　170

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

歴史と他者——武田泰淳　202
小説という闘争——中上健次　216
死者の眼——森敦　223
漠たる哀愁——阿部昭　229
近代の超克について——廣松渉　233

装丁　菊地信義

終焉をめぐって

第一部　固有名をめぐって

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

一九七〇年＝昭和四十五年——近代日本の言説空間

1　区切り

昭和という言葉、あるいは昭和という時代にかんする言説が突然氾濫しはじめたのは、一九八七年夏、天皇の病気が伝えられたときであった。一九八九年初めに「昭和」は終った。「昭和の終焉」を語る言葉が飽き飽きするほど消費された後で、それは終ったのである。終ってみれば、とにかく「昭和」という時代があったことになり、その歴史的回顧がはじまる。しかし、歴史を元号で区切って見ることにどんな意味があるだろうか。

日本の元号は、明治以来「一世一元」となったが、それ以前は、頻繁に改元されている。改元の理由としては、祥瑞、災異、さらに讖緯説にもとづく辛酉および甲子の年の改元があげらる。つまり、改元は、呪術的あるいは祭式的なものであって、代（世）の「死による再生」をめざしている。この機能は「一世一元」によって変わったわけではない。明治・大正・昭和といった区切りは、それ自体始まりと終りをもつ代（世）を組織する。しかし、こうした区切りはたんに国内的なものであり、多くの場合錯覚を与える。

たとえば、われわれは明治文学とか大正文学とかいった言い方をする。すると、あるまとまっ

たイメージが浮かび上がる。江戸時代についても同様で、元禄とか文化文政とかいえばわかったような気がしてしまう。だが、こうした了解はわれわれを奇妙な錯覚に閉じこめるのである。この錯覚は単純にそれを西暦で考えてみるだけで明らかとなる。私は一九七五年にイエール大学で明治文学について教えていたとき、そのことに気づいた。たとえば、日本で「近代文学」が成立してくるのは、明治二十年代から三十年代にかけてであるが、私はそれまでこの時期が西洋で「世紀末」と呼ばれる時期であることを考えてみもしなかった。あるいは、大正時代が、第一次大戦（大正三年）やロシア革命（大正六年）と同時代であることを考えなかった。よく知っていたにもかかわらず、想到しなかったのである。それは明治・大正・昭和といった元号による区分が、いかに外部との関係を忘却させ、一つの自立的な言説空間を組織してしまうかということを示す例である。

そうであれば、こうした元号による区分を一切すてて西暦で考えればよいかというと、そういうわけにはいかない。明治の文学というものを、たんに十九世紀や二十世紀といった概念で語ってしまうことはできないのだ。そこには、明治という固有名をとると消え失せてしまうような何かがある。しかし、それは、日本に独特の位相があるとか内部的に閉じられた時空間があるという意味ではない。その逆に、この固有名は、内部的な完結を許さないような外部との関係性をはらんでいるのである。しかも、明治的とか大正的といったイメージは、厳密に天皇の在世期間と対応しているわけではない。われわれが「明治的」とか「大正的」と呼ぶものは、ある関係構造を象徴するかぎりで確かに存在すると言っていいのだし、それを廃棄することは、そのような関係構造を切り捨ててしまうことになるのだ。

もう一つ大切なのは、西暦がたんなる順序数であるかにみえて、それ自体物語的な分節をはら

んでいることである。そもそもそれはキリスト教の物語によって意味づけられている。さらに、百年（世紀）や千年（千年王国）には特殊な祭式的な意味が付随している。たんなる順序数であれば、「世紀末」などありえないだろう。だが、その観念が、出来事に「世紀末」的な意味を与えるだけでなく、事実「世紀末」的現象を生みだしてしまうのである。そうでなくとも、歴史を十八世紀、十九世紀、二十世紀といった百年の区分でみることにおいて、すでに物語的な区切りがなされている。われわれが「明治文学」というのと本質的な違いはない。つまり、西暦で考えるとき、われわれはあるローカルな歴史を普遍的なものと見なす思考に閉じこめられてしまう。さらに、こうした「普遍性」は、われわれがどのような言説空間に属しているかということを忘れさせてしまうのだ。

むろん西暦は不可欠である。ただし、それはいわばメートル法のようなものであり、キリスト教的な意味を捨象したものでなければならない。それは、各地の「代＝世」がそれぞれの共同体の幻想的空間にしかないこと、多数の世界（代＝世）が同時的に共存し相互的に関係しあっていることを開示するものであるかぎりにおいて、さらにいかなる区切りも任意であることを示すかぎりにおいて不可欠である。「普遍的な世界」とは、こうした多数的な世界が相互に関係しあう、その諸関係の総体としてしかありえない。

元号で時代を区切ることは錯覚を与えると私はいった。しかし、どんな区切りも錯覚を与える可能性があることに注意しなければならない。たとえば、ひとは戦前と戦後という区切りを平然と使っている。たしかに、第二次大戦は一つの区切りであり、その後の米ソ二元的体制の終焉を顕在化した一九八九年の出来事も区切りである。しかし、こうした区切りだけがすべてではない

し、第一義的なものでもない。敗戦によって日本は変わったが、ほとんど変わっていない領域もあるし、また目立った変化といっても、事実上戦前・戦中にすでに起っていたものが多い。それなら、こうした区切りを否定すべきだろうか。

しかし、区切りは歴史にとって不可欠である。区切ること、つまり、始まりと終りを見いだすことは、ある事柄の事味を理解することである。歴史学は、ほとんど〝区切り〟をめぐって争っているといってよい。というのは、区切りがそれ自体事柄の意味を変えるからだ。たとえば、「中世」という概念がある。それをいいだしたのは、十八世紀ドイツの凡庸な歴史家だが、以後歴史家は、〝どこまでが中世か〟という区切りの問題をめぐって争ってきた。あるものは、十八世紀、たとえばニュートンさえも〝中世人〟であるといい、他の者は、ヨーロッパ十二世紀に〝近代〟が始まっているといっている。だが、彼らは「中世」という区切り自体までは放棄しないのである。

今日では、エピステーメー（フーコー）とかパラダイム（クーン）という区切りが語られている。他方に、柳田國男が、『明治大正史』でやったように、明瞭な区切りのない領域で歴史を見ようとする学派（アナール学派）もある。しかし、事情は別に変わっていない。「パラダイム」によっていわれているのは、体系的・教科書的な知として語られる科学に、非連続的な区切りをもたらすことであり、「エピステーメー」によっていわれているのは、超越的主体や理念による区切りに対して、出来事としての言説が織りなす非連続的な移行としての区切りを立て直すことである。アナール学派の場合は、目立って見える政治的な歴史的区分に対して、微分的領域における変容や交錯を見るのだが、これも結局はもう一つの区切りを提示するのであり、それによって従来の区分＝意味づけを変更するのである。

だが、もっと長期的な区切り、たとえば、新石器時代以後と以前といった区切りも可能である。何年、何十年、何百年、何千年といった視点のとり方によって、区切りそのものが違ってくるのだ。のみならず、それによって「歴史」の対象と意味も違ってくる。しかし、どれかの区切りが優位にあるのではない。レヴィ＝ストロースは、「歴史はいくつもの歴史領域で形成された一つの不連続集合である」といっている（『野生の思考』）。いいかえれば、「歴史とは一つの方法であって、それに対応して判然たる一つの対象物があるのではない」。大切なのは、それゆえ、自分がどのレベル・領域で語っているのかを自覚していることだ。さらに、どんな区切りもそれ自体始まりと終り（目的）を見いだすことである以上、それがなんらかの目的論的配置を避けられないということを自覚しておくことだ。

2　明治と昭和

すでにいったように、「明治」と「大正」というものは、厳密に天皇の在世期間と対応していないし、天皇個人とは関係がない。天皇はまさに「象徴」でしかない。「昭和」にかんしても同じことがいえる。言葉の意味はその用法であると、ウィトゲンシュタインはいっている。たとえば、「昭和」が何を意味するかを見るには、それがいかに使われているかを見ればよい。「昭和」が終った時点で誰もがこぞって忘れてしまったのは、少なくとも一九八七年までは「昭和」という語が歴史家によってほとんど使われていなかったことである。それまで昭和史や昭和文学論の如く、「昭和」という元号のついた本や論文はたくさん書かれているが、それらは一般に戦前に関するものである。昭和二十年以後に関しては、「戦後」という名がついている。しかも、一九六五年以後には「戦後」という言葉さえあまり用いられなくなっている。「戦後文学の終焉」と

いうことがいわれたのも、この時期であった。それと平行して、「昭和」という語は時代区分として意味をもたなくなった。

たとえば、「昭和初年代」とか「昭和十年代」という言い方はポピュラーだが、そのような言い方が可能なのは「昭和三十年代」までである。「昭和四十年代」という表現はめったに聞いたことがない。というのは、「昭和三十年代」には「一九六〇年代」という表現がすでにオーヴァラップしていて、以後「七〇年代」や「八〇年代」というのが普通だからである。「昭和三十年代」と「一九六〇年代」とでは、時期が五年ずれるだけでなく、大分ニュアンスが違ってくる。後者が国際的な視点において見られているのに対して、前者は、いわば、明治以来の日本の文脈を引きずっている。それらが同時に共存しえたのが、およそ昭和三十年代である。その意味では、のちにいうように、「昭和」は四十年（一九六五年）あたりで終っているといってもよい。つまり、こうした言葉の「用法」は、厳密な規定よりも正確にその「意味」を示しているのである。

たとえば、一九七〇年のころの新左翼運動は「世界的な同時性」の意識によってなされている。そこからふりかえれば、一九六〇年の安保闘争は、たんにその発端でしかないように見える。しかし、昭和三十五年の安保闘争は、前者とは基本的にちがっている。それは、むしろ「明治」以来の諸問題を集約的に問い直すような闘争であった。が、私がそのことを理解したのは大分あとのことで、その当時十八歳の私はまったくそんなことを考えていなかった。私は、安保闘争を「民主か独裁か」でとらえる竹内好の観点が理解できなかったし、「日本浪曼派」の問題に固執する橋川文三の意図も理解できなかった。私がそこから読みとったのは、せいぜい日本の〝前近代性〟が戦後においても残存し、あるいは復活するというようなことでしかなかった。それは、私が一九六〇年代後半における三島由紀夫の変貌を理解できなかったことにもつながっている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.